

ソニー創業者の井深大は、戦後日本が科学技術で復興するためには、理科教育こそ重要だと考えていました。井深は日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを発売し、会社経営がようやく軌道に乗り始めた1959年に、「ソニー小学校理科教育振興資金」の贈呈を始めました。

当時の贈呈式当日に、井深大から受賞校の先生方へ贈ったメッセージをご紹介します。

※内容および名称・肩書等は当時のものです。

第3回（1960年） ソニー小学校理科教育振興資金贈呈式

「科学的な本能の芽をのばす」 井深大 ソニー株式会社社長（当時）

すべての人が科学の素養を

このたびソニーの小学校理科教育振興資金第3回計画書を募集しましたところ、前回は上回る170数校から熱心な計画書をいただき、それらを慎重に審査した結果、宮崎市赤江小学校以下の方々が入られて、私どものささやかな振興資金を受け取っていただく機会を得ましたことを非常に嬉しく思います。

昨年、第1回を始めた当初から、皆さまがたが熱心にわれわれの計画に応じていただいて、感謝しています。とくにこの審査には、第1回目から、茅先生（当時、東京大学学長）、篠原先生（当時、科学技術庁次官）、内藤先生（当時、文部省初等中等教育局長）に非常な熱意をもってあたっていただき、頭のさがる思いであります。

私はちょうど審査の時期にアメリカにいており、計画書の内容については、タッチしなかったのですが、三先生をはじめみなさんが、熱心に審査にあたってくださったことをご報告いたします。

よく世間には、「私は文科出身で技術的なことは全然わからない」という方がいます。ところが、アメリカなどで、多くの経営者に会い、いろいろ技術的なことを話すと、非常によく技術的なことを知っている。で、技術屋出身かといってみると、経営出身者であったり、経理出身者であったりするのです。いわゆる必要程度以上の技術の内容を、よく理解しているのです。一方、日本では技術屋出身であっても、だんだん技術的なものから離れていって、経営的なことをやるのが、何か偉いかのような感を抱かせるのが実状のようです。とくに文系出身の方々には、技術的なこと、科学的なことにタッチしてはいけないかのような錯覚をもっているような状態です。

自然に理科的な芽ばえをのばす

考えてみますと、小学校の児童や小学校以下の子どもたちが、おもちゃを楽しんだり、小さい動物をつかまえて観察したり、いじめたりなどして楽しむ。また植物などを見て楽しんでいる。さらに進んで工作的なことに興味を持つ。これは人間の本能であると思うし、このようにして人間が理科的に進み得る下地ができるのだと思います。

ところが、日本の教育は途中から理科的なことから離れて、文科的な方面にいかざるを得ないような形がとられているようです。子どもが本能としておぼえたいときに、理科教育的なことに自然に親しんでいけばそれが本性となって育ち、文科を専攻しようと、法律を専攻しようと、やはり理科的な才能が生かせるはずです。それが、その国の工業的なレベル、科学的なレベルを決定づける大きな力となるのです。

そのようなことを考えると、日本のいままでの科学教育は、なにか欠けているところがあるのではないかと考えられます。理科教育を、ことさらむずかしくしているのではないか、自然に理科教育がうえつけられて行かねばならないのではないかと考えています。

その点で、私どもの計画は日本の理科教育のためにお役にたてるのではないかと思います。ささやかな計画でして、日本の科学的レベルを動かすというような力を持っているとも自負していませんが、ごくささやかなことが、大きな芽となり、花となって咲くなら、われわれの計画が満足すべきことなのだと確信して、この理科教育振興資金を始めたのであります。



「明日の理科教育のために 第3集
(昭和35年6月発行)」より

科学教育の模範となれ

今回応募された内容は、一回一回洗練され、われわれの意向にだんだん近づいてきています。特に今回は、第1回、第2回に応募されたところが、ふたたび賞に入っています。考え方によっては、角度がせまいように思われますが、一方前に勉強されたところが、わずかばかりの資金が役にたって、いっそうの勉強をされた結果だと考えると、これは非常に意義のあることなのです。私は入られる資格のある学校は、何べんでも入っていただき、ますますこの方面の模範になっていただければ結構だと思います。

なお、私どもの計画は、ソニーがある以上続けて行きたいと思いますので、ますます皆さま方のご協力をお願いしたいと思います。終わりに審査にあられた、茅先生(当時、東京大学学長)、篠原先生(当時、科学技術庁次官)、内藤先生(当時、文部省初等中等教育局長)に深くお礼を申し上げます。